

十一 オリーブ山において主、慰めを受けたもう

わたしは主が再び洞穴の中で祈っておられるのを見た、主は苦しみに対する嫌悪に打ち勝った。「わが主よ、思し召しならば、この杯をわたしから取り去りたまえ。されどわが意のままにあらず、思し召しのままに。」と辛うじて祈られた。

その時主の前に深い穴が開け、光線のように長い階段が古聖所に下って行くのを見た。主はそこにアダム、エヴァ、すべての太祖、預言者、義人たちおよび聖母の両親や、洗者ヨハネを見た。かれらは下界で主の来られるのを一心に待ち望んでいるので、主の愛深き心は強められ鼓舞された。これらの待ちこがれている囚人に天国は主のご死去によって開かれるのである。主はご自身かれらをただ希望に支えられている牢獄から救い出してやらねばならなかった。イエズスはこれらの古聖所の人々を心からの感動をもって眺められた。その後天使は主の前に未来のあらゆる聖人の群れを示した。かれら聖人たちは主のご苦難の功績に一致して戦い、主に依って天のおん父に一致されるのであった。かれらがみなそれぞれの苦難の努力で飾られて、救い主の前を通り過ぎる光景は言葉に言い尽くせぬほど、美しく慰めに満ちた光景である。使徒、弟子、童貞女、聖婦人、殉教者、証聖者、教会のすべてのかしらと司教、あらゆる修道士の群れ、実に聖人のありとあらゆる大群衆が主の前を通り過ぎて行った時、主はその贖罪の尽きざる力をごらんになった。かれらはみなその苦しみや、勝利の冠をもって飾られていた。しかし各自が光栄を獲得した戦いや、苦しみや、勝利の種類が違っているごとく、色とりどりの花がかれらの冠の中に咲き誇っていた。しかしかれらの生涯と努力、戦闘力と勝利への力、またその誇り、凱旋の光と色などはただイエズ

ス・キリストのご功績との一致からのみ得ていた。その多様性は決して偶然ではなく、唯一太陽である主のご苦難からの輝き、すなわちそこからいろいろ照り映える光から来ている。実にこの世に來たり、肉となりたもうたみ言葉の中には、おのおのの人を照らす光たる生命がこもっていた。

救い主の靈魂の前を通り過ぎて行ったのは未来の聖人の一団であった。主はあこがれに燃える太祖と、新約の聖人の勝利の行進との間に立ちたもうたが、かれらはみな大きな勝利の冠のように救世主の愛の心を取りまいていた。このたとえようもない感動すべき光景はあらゆる人間的苦悩を耐え忍ばれる救い主の靈魂を少し勇気づけまた慰めた。

ああ、主は実にその兄弟にして被造物なるわれわれをこれほどまで熱愛されたので、ただ一人の靈魂のためさえもすべてを喜んで忍ばれたであろう。

しかしこの慰めの幻影はまた消え去った。天使は目前に迫ったご苦難を主にお見せした。その時活動していた天使の数はおびただしかった。わたしは主のすぐ前で、ユダの接吻から十字架上の最後の言葉の幻影をきわめてはつきりと見た。わたしはもう一度見るご苦難をその時すでに見た。ユダの裏切り、弟子の逃亡、アンナ、カイファのの前での嘲弄とおん苦しみ、ペトロのいなみ、ピラトの裁判、ヘロデの嘲り、鞭打ちと茨の冠、死刑の宣告、十字架の重荷に倒れし主、聖母とのめぐり会い、奴隷たちの聖母に対する嘲笑、ベロニカの汗を拭った布、残酷な釘付けと高く押し立てられた十字架、ファリサイ人の嘲笑とマリアおよび忠実な人々の苦痛、おん脇腹がつかぬかれ開かれる光景、一言にして言えば、一切の状況がわたしの心にはつきりとまた明らかに、しか

もこまかく示された。人々のあらゆる行動あらゆる感情や言葉を、恐れおののき憂いに満てる主と共にわたしは見、かつ聞いた。しかしそれらすべてを主はわれわれに対する愛から喜んでご自分に引き受けられたのであった。

ご苦難の幻影が終わるや、イエズスはあたかも死人のようにうつ伏せに倒れてしまわれた。天使と幻影とは消え去り、血の汗は前よりもいっそう烈しく流れ落ちた。わたしはおん血が黄色の上衣まで落ち、そこからしみ通のを見た。今や洞穴の中は真っ暗くなった。

その時わたしは一位の天使が天から降って来るのを見た。その姿は前の天使より大きく、はっきりとし、ずっと人間に近い形をしていた。かれは長いひらひらとなびく上衣を着け、晚餐の杯の形をした小さな容器を胸の前に捧げていた。その杯の口には小さな赤く輝いた食物が浮いていた。天使は主に気付け薬を捧げるために来ていたのである。

かれは主の口に輝く食物をお入れし、小さく輝く杯からお飲ませして再び消え去った。

イエズスは今や、力を得られた。主はなおしばし感謝されつつ静かに洞の中に止まられた。主は確かに憂いておられたが、超自然的に強められたもうたので、恐怖も不安もなくしっかりとした足取りで弟子たちの方に行くことがお出来になった。主はなお青白くやつれ果てて見えたが、まっすぐに立たれ、決然として行かれた。主は顔を汗拭きでぬぐわれ、髪をそれでなで下ろされたが、髪はまだ血の苦しみの汗とにぬれ固まってさがっていた。

イエズスが弟子たちの所に来て見られると、かれらは最初の時

のように頭をおおい、横になって眠り込んでいた。主はかれらに「今は寝ている時ではない。起き上がって祈らねばならぬ。」と仰せられた。「なぜなら、見よ、人の子が悪人の手に渡される時が近づいた。立て、行こう！見よ、裏切り者が近づいて来た！ああ、もしかれが生まれなかつたらかれにとってよかつただろうに！」弟子たちは大いに驚いて飛び上がり、おののきながらあたりを見回した。そして気を取り戻すや、ペトロが性急に言った。

「主よ、あなたを護るために他の者を呼びましょう！」しかしイエズスはかれらに、まだ谷をへだてて少し離れたケドロンの小川の向こうがわにいたいまつを持ち武装した一軍を指さされた。主は落ちついて二、三語られ、重ねて聖母をお頼みになった。それから「さあ、かれらの方に行こう！わたしは何の抵抗もせずに関を敵の手に渡すつもりだ。」と言われた。主は三人の弟子と共に捕手の方に向かって行かれた。一同はオリーブの園を出てその園とゲッセマネの園とを分けている道に出た。